



羅針盤



中村 晃一郎

Koichiro Nakamura

埼玉医科大学皮膚科 教授

好酸球の皮膚疾患への多彩なかかわり

好酸球や好中球などの顆粒球は古くから注目を浴びてきた。このうち好酸球は、Charcot-Leyden 顆粒をはじめ特徴的な顆粒を有し産生分泌していることから、命名されている。好酸球の意義に関しては、寄生虫に対する役割が強調されてきたが、近年ではアレルギー疾患や膠原病などにも重要であることが明らかになっている。

疾患名に「好酸球」の言葉が入る皮膚疾患は多い。好酸球性膿疱性毛包炎、好酸球性蜂窩織炎をはじめ数多くの皮膚疾患がある。好酸球は肺や消化器などの他の臓器にも浸潤するが、これほど多くの好酸球の名前を有する疾患のある臓器は皮膚以外にはないと思われる。このことは皮膚が SALT (skin-associated lymphoid tissue) というような免疫細胞を有する特異な臓器であることと深く関係していると思われる。すなわち、皮膚にはサイトカインを産生する細胞が多数あり、これによって好酸球の生存や遊走が容易に行われることと関連するのではないだろうか。TNF- α 、IL-1 は血管の接着分子発現に

関与し、IL-5 は血中や皮膚での好酸球の生存を延長し、eotaxin は好酸球の血管内から皮膚への遊走を誘導する。炎症の際に生じる活性化した好酸球は、表皮、真皮、血管、付属器で、紅斑、丘疹、結節、水疱などさまざまな皮疹の形成に関わってくるものと推測される。

好酸球の本来の機能は早期での防御機能としての炎症の惹起であり、好中球、リンパ球が続く炎症反応を形成する。一方、炎症の遷延化や、抗炎症作用、治療抵抗性にも関わっている可能性が報告されている。非常に多彩な「顔」をもち、その機能はまだまだ解明の余地があるといえよう。

本特集では、好酸球が特徴的な役割を示す症例を図や写真を中心にご紹介いただいた。また病理組織学的所見については皮膚病理の立場から紹介いただいている。ご多忙のなか、ご執筆いただいた先生方に深謝します。本特集を通じて好酸球と皮疹との関係や皮膚症状における意義について興味をもっていただければ幸いです。